

特別寄稿

カンボジア・コーヒー農園 開発支援に参加して

圓尾飲料開発研究所長 圓尾修三

★カンボジアコーヒーとのお付き合い

二〇〇一年、秋、米国のサンフランシスコにあるスタンフォード大学、京都校に客員教授として赴任してきておられた、ボストン大学文化人類学教授の、メリーホワイト博士から電話があり、京都でお会いしたのが、私とカンボジアのコーヒーとの出会いであった。

教授は食文化を研究する傍ら、過去日本で何年間も東京の大学で教鞭をとられて研究をされており、同時にAsia Relief for Cambodia, American Assistance for CambodiaのNPOの主要メンバーとして、活躍をされていた。

何度かお会いして行く内に、NPOの責任者であるバーニー・クリッシャー氏、リチャード・ダイク氏と出会い、カンボジア国に屋根のある学校をカンボジアの小さな子供達に贈る運動の仲間入りが許され、私としてはカンボジア、東北部の特に貧困者の多い少数民族農村地帯の人々に、ココ栽培や貧弱な農産物栽培からコーヒー栽培へと、転作指導の役割分担で積極的に参加する事になった。コーヒーの葉もココの葉も、共

に熱帯のある意味での興奮剤であるが、同じ栽培をするのであれば、香り豊かで、生活をエンjoyできるコーヒーの葉の栽培指導に協力しようと思った。

コーヒーは、赤道を中心とした所謂コーヒーベルトと言われる広い地域で栽培され、年間の生産量はブラジルをトップとして世界で70数カ国、一・二億袋も出来る。ブラジル、コロンビア、グアテマラ、メキシコ、インドネシア、エチオピア等は、高品質コーヒーの栽培国名として多くの人々に知られているが、同じコーヒーベルト上にあるカンボジアでのコーヒー栽培は、殆ど知られていない。

熱帯性農産品としては、これらの地域で生活している人々にとって、お茶、砂糖、ココア、バナナ、オレンジ等の農産品、又、コットンやタバコの栽培よりも、現金収入の少ないこれらの地域の農民にとっては換金性が高く、健康的で、多くの消費者から愛飲されているコーヒーの栽培が、これら多くの発展途上国にとって最適の栽培作物である。

コーヒー栽培歴史の短い、又長い間戦乱に巻き込まれたカンボジアでは、農業立国として国家存続を果たすためにも、コーヒー栽培

を行うことにより、彼らの生活意欲と、コーヒー栽培に関して色々な難題を抱えているが、その収穫の喜びを分かち合うために、ささやかな協力をしたいとの志でお付き合いを始めた。

★ラタナキリ・コーヒー支援開発の経緯

カンボジア北東部、ラタナキリ(Ratanakiri)地方の丘は、北緯14度にあり、標高500メートルの涼やかな気温と、雨季乾季が明確に分かれた気候に恵まれ、山から流れる清流を引いて、ラタナキリコーヒー園が営まれている。今、この農園のコーヒーを支援し、日本とアメリカで販売するボランティア運動が展開され始めている。そもそも、この国は長い間、隣国ベトナム戦争に巻き込まれ、戦後は更に長期間内戦が打ち続き、内戦終了後、1993年国連の監視の下に民主的な選挙が行なわれ、民主共和国として立ち上がった。しかし、長年の戦乱による国土の疲弊には、その回復に長期の時間が必要である。

そうした中、日本在住の米国人、及び米国ボストン在住の米国人、日本人により、そのカンボジア復

興を支援する為に、1994年に、

Japan Relief for Cambodia,

(カンボジアの為に
日本の支援)

American Assistance for Cambodia

(カンボジアの為に
アメリカの協力)

の二つの団体が設立された。メン

バーは、
Banie Krisher 氏 (会長)
Wakako Hironaka (広中和歌子)

氏
Rick Dyck 氏
Merry White 氏 である。

この団体の具体的行動は、大き

く分けると、次の4つである。

1. 屋根のある学校をカンボジア
の子供たちに
<http://www.cambodianschools.com>

2. 希望のあるシアヌーク病院の
経営
<http://www.sihosp.org>

3. FLO (Future Light
Orphanage) 希望ある明るい孤
児院の経営
<http://www.futurelight.net>

4. カンボジア ラタナキリ県で
のコーヒーへの農業転作指導
<http://www.ratanakiri.com>

1. ポルポト政権下で、200万

人の国民が命を失い、教育制

度は破壊された。現在、学校

の無い村が国内で3000

もある。学校への就学も出来

ず、学校はあっても屋根の無

い野外授業で、風雨や熱帯の

強烈な太陽にさらされて勉

強している。

その学校を建設する為に、

わずか156万円の寄付で、

3-5教室の校舎を建て、2

年間の教職員給与と備品を

まかなうことが出来て、そし

て寄付者の名前のついた学

校が建てられる。寄付金は世

界銀行の補助金を併せて建

設される。現在までに既に二

四四校完成し、その第一番日

の開校は、広中スクールであ

る。

2. 貧困に喘ぐカンボジアで、24

時間の高品質な医療と医療

関係者のトレーニングセン

ターを兼ねた、多くの経験を

持つ高度医療の専門医(カン

ボジア国内医師230名、国

際スタッフ25名を含む12

0名のスタッフ、8名の外科

医、70名のナースを揃えた病

院名が、希望あるシアヌーク

病院である。

リーダー (会長) のバー

ニークリッシュヤー氏と、日

本人医師のフカミ氏の発案

により、国際的事前団体や多

くの海外大学の医療機関の

医療技術、援助支援で設立さ

れ運営されている。2003

年度では合計517、862

名がこの病院で治療を受け、

更に6、758名の手術や出

産があり、HIV患者も65、

597名治療を受けている。

カンボジアの子供たちの

30%が5歳以下で死んで

しまう。カンボジア人の平均

寿命は2002年度で、アジ

アではラオスよりも更に低

い生存寿命である。男性寿命

が51・9歳、女性57・1

歳、日本では男性78・4歳、

女性85・3歳から見ると、

夫々26・5歳、28・2歳

も若死にしている。これも生

活条件の悪さ、蚊等の媒体に

よる疫病、内戦中に埋め込ま

れた600万個と言われる

地雷の被害、医療施設の不足

等に大きく影響している。

3. FLO、希望ある明るい孤児

院は、水と電力の不足してい

る首都プノンペンから10km

の場所に、1993年設立さ

れ、設立者のカンボジア人夫

妻 (院長は Madam Nuon

Phaly) により、現在287

名の孤児を守り運営してい

る。

子供達は貧困から立ち上

がる為に、孤児院では年長者

が年少者を指導し、彼らの運

営資金のうちの一部を自分

達で民芸品(絹織物、小さな

手作り家具、土産物)を作り

それにあてている。孤児院で

は高等学校まで勉学できる

機会を与え、社会に出た後も

自身が必要な技術を学ぶこ

とにより、明るい未来を生き

て行く為の教育もある。

又、孤児院では年長者は英

語かフランス語とコンピュー

ターを学んでいる。過去10年

間に孤児院の海外養子縁組

は370名を数えた。圧倒的

に日本人(アメリカ国籍の日

本人を含む)からの養子縁組

が多く、中には1人の人で10

名の孤児の養子縁組を行っ

ている。

支援方法は色々ある。例え

ば年間180US\$ (約2万

円)で子供をホームステイさ

せる。詳しくは

Bernie@media.mit.edu に

メールすれば詳細が聞ける。

4. カンボジア ラタナキリ県での、コーヒーへの農業転作指導。

2002年、メンバーのRick Dyck氏が、カンボジア政府から割り当てられた、次のカンボジア国内の山村での学校建設支援先がラタナキリ県であった。FLOのマダム Nuon Phaly は、プノンペンにあるFLOのラタナキリ支部での開校を、現在模索している。この県はRick Dyck氏は、既に3校の学校を開校している。

ラタナキリ県でのコーヒー栽培現状は、後の写真入り報告を見ていただきたい。私はこの段階で、Japan relief for Cambodia のラタナキリ コーヒー栽培転作プロジェクトに、参加を許される事になった。

★第一回、第二回のコーヒー生豆出荷

2003年に第一回カンボジア・コーヒー生豆の日本と米国への出荷後、相前後して3度にわたるカンボジア・コーヒー生産者への指導等を行い、2004年7月末に第二回目の日本向け輸出が行

われた。輸入はこのメンバーのRick Dyck氏が経営する、ティール・シー・エス・ジャパン株式会社社が窓口である。

この会社は、コーヒーとは一切関係の無い精密コンピューター機器の製造会社で、本社が横浜にあり、中国上海に工場がある。

カンボジアは、ICO(国際コーヒー機関)の加盟生産国ではなく、又、国家やコーヒー関係機関、協会での品質管理規定も全く出来上がっておらず、カンボジア全土では、年間100トンにも満たない生産量であるコーヒー未経験の国である事からも、あらゆる初歩的支援を行う必要がある。これは非常に時間のかかる仕事であるが、農民が将来の生活設計になくならない作物の栽培という、育て、共に生きる喜びが出来るような支援を差し伸べたい。

過去に持ち込まれたアラビカ種豆は、肥料代金等の調達が不可能で、栽培は進んでいないが、これからは、前回持ち込んでいたアラビカ種の試験栽培を開始する。

第二回目の入荷に伴い、通関完了した豆の品質管理表を、金沢大学及び、神戸大学教授、ブラジルセラードの生産者、国内のロースターに勤務される友人等、多くの

協力により作成できた。

第二回目の日本への輸入が始まり、全国7ヶ所のロースター、マイクロ・ロースターのご支援で販売が始まった。アジアン・ブレンド、カンボジア・ボランティア・ブレンド等多くのブレンド名で行われており、世界の生産70数ヶ国の仲間に入ったカンボジア豆も今後の発展が楽しみである。支援企業も協力者として、又自社のイメージ アップを試みるなど、販売状況は益々期待される。

カンボジア コーヒー生産者の生産原価から見ると、世界のコーヒー相場とかけ離れた生産者出荷価格となっているが、生産者の今後の生産意欲発揚、ボランティア活動の意味もあり、生産者からは相場よりも高く購入し、それを日本の協力者にご負担を仰ぎ、購入の協力を戴いている。更に、これまでの輸入に関わる諸経費等の差額は、TCSジャパン(株)が全て負担をする事になっている。

カンボジア シアヌーク国王がJapan relief for Cambodia の代表者をシアヌーク宮殿に招き、支援感謝のセレモニーを催され、又、今年6月には駐プノンペン日本大使館の高橋全権大使を訪問し、ラタナキリ・コーヒー開発の報告と

ご理解を戴いた。

更に、今回のラタナキリ・コーヒー開発に協力された日本のロースターにも、カンボジア政府関係機関から、感謝状贈呈の準備を現在されていると言われている。

なお、カンボジア・コーヒー品質分析表(次頁)を参照していただければ幸いである。

★カンボジア東北部の県、

Ratanak Kiri (ラタナ・キリ)

ラタナ・キリの「ラタナ」は地名で、「キリ」は「山」を言う。「ラタナ山」という意味。

ラタナ・キリの南側の県名は、Mondul Kiri (モンダル・キリ、モンダル山) と言う。

東側をベトナム、北側はラオスに国境を接した、カンボジアの最東北部の県である。県の東西には、メコン川の支流が流れている。県北部には国立公園(と言ってもジャングルであるが)があり、人口約14万の県で、その殆どが少数民族のクメール、ラオ、ベトナム人からなっている。この土地の人々はその為に近隣語は大概理解している。県都はBan Lung (バロン) である。

カンボジア コーヒー品質分析表

2004年8月19日
 圓尾飲料開発研究所

- ① 試料
 カンボジア グリーン コーヒー ビーンズ 2003/2004 crop
- ② 生産地
 Cambodia, Ranatakiri Province, O Ya Dav
 (カンボジア国北東、ラオス、ベトナム国境近隣)
- ③ 農園主
 Nou Ly
- ④ 農園地面積、及び標高
 200㊦、標高 550メートル
- ⑤ 輸出者
 Japan Relief for Cambodia, Phnom Penh, Cambodia
- ⑥ 輸入者
 TCS Japan, Yokohama, Japan
- ⑦ 輸入
 2004年7月30日
- ⑧ 品種
 カネフォーラ ロブスタ
- ⑨ 水分含有量 (穀類水分計: Kett PM-600)
 11.3パーセント
- ⑩ 欠点豆 (100g中のカウント個数)
 * 未成熟豆 86個
 * 欠け豆、虫食い豆 13個
 * 発酵豆 12個
 * 異物無し

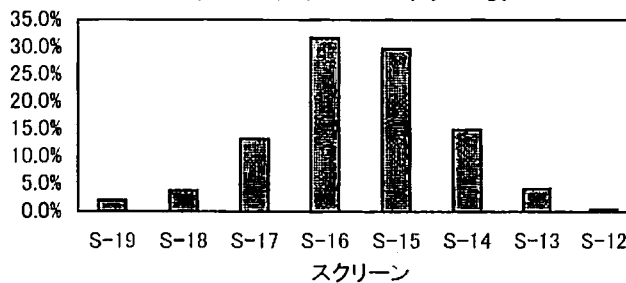
全体評価

- ・ 全体の未成熟豆の割合が多少目立つ。
- ・ 水分の抜けた豆 (オールドクロップ) 43個確認される。

⑫ スクリーンサイズ

スクリーン	比率	累計比率
S-19	2.1%	2.1%
S-18	3.8%	5.9%
S-17	13.2%	19.1%
S-16	31.7%	50.8%
S-15	29.7%	80.5%
S-14	13.2%	93.7%
S-13	4.1%	97.8%
S-12	0.5%	100.0%

カンボジア生豆サンプルスクリーン表



下記の品質規格も総合して Grade 2 クラス判断できる

⑬ 品質規格

スクリーン 18 以上 90%以上	Grade 1 A
スクリーン 16 以上 90%以上	Grade 1
スクリーン 13 以上 90%以上	Grade 2

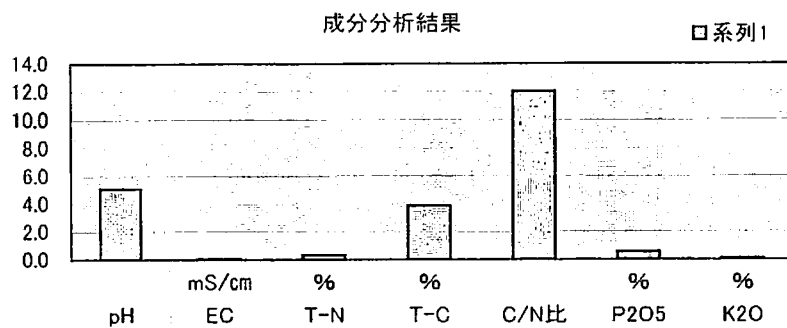
⑭ 栽培土壌

表 コーヒー栽培土壌の成分分析結果

分析項目	分析値
pH	5.1
EC mS/cm	0.07
T-N %	0.32
T-C %	3.88
C/N 比	12.0
P2O5 %	0.55
K2O %	0.11

分析法

1. pH 及び EC の測定法
乾燥粉体 10g + 水 50ml → 30 分振篩 → pH メーターで測定、
引き続き EC メーター測定 (60 度℃で 24 時間通風乾燥後)
2. %表示は資料の乾物中の含有量
3. 全炭素、全窒素の測定法
乾燥粉体 50mg を C/N コーダー (乾式燃焼法) で分析
4. 全リン酸、全カリの測定法
湿式灰化法で分解
乾燥粉体 50mg + 硝酸 15mg + 過塩素酸 7mg → 加熱 (200℃強)
100mg に定容して原子吸光光度法で分析



⑮ 官能評価

癖の無いバランスのとれたロブスタ味
ヨーグルトのような酸味を若干感じる
10カップ中、2カップに軽いロブスタ特有の発酵に近い味を感じる。

⑯ 推薦焙煎度合

Agron/SCAA (Specialty Coffee association of America) Roast Classification Color Disk System, 及び一般焙煎度合名称では、

<u>Agtron Tile #</u> (アグترون ナンバー)	<u>Common Name</u> (一般呼称名)
Tile #55 Medium Brown (ミディアム ブラウン)	Medium High, City Roast ミディアム ハイ シティーロースト
Tile #45 Moderatory Dark Brown (モデラトリー ダークブラウン)	Full City, Espresso フルシティ エスプレッソ
Tile #35 Dark Brown (ダーク ブラウン)	French Espresso, Italian フレンチ エスプレッソ イタリアン

⑰ 推薦メニュー及びブレンド

- Espresso (エスプレッソ)
- Cappuccino (カプチーノ)
- Cafe latte (カフェ・ラテ)
(Brazil 35%, Colombia 35%, Cambodia 20%, Ethiopia 10%)
- Ice Coffee
(Brazil 30%, Colombia 30%, Cambodia 30%, Honduras 10%)
- Continental Hot Coffee (コンティネンタル ホット コーヒー)
(Brazil 30%, Colombia 25%, Guatemala 25%, Cambodia 20%)

バンルンから首都プノンペンまでは582km。ラオス国境、ベトナム国境は、ベトナム戦争のベトナムルートになっていた為、米国軍の徹底的な北爆攻撃の対象になった地域である。

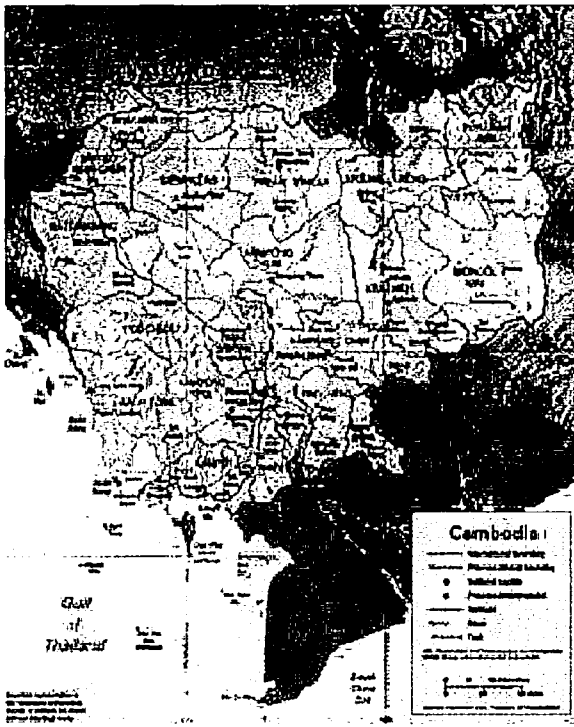
県の主要な産物は、農作物だけである。主たる農産物は自給自足商品で、陸稲米、イモ類、豆類、人参等の野菜類と換金物のカッサチュナツツ、ピーナツ類。ナツツ類は油で揚げられて、カンボジア人のどこの食卓でも、何時も添えられている。平均的な所得は、1日あたり最高でも、US\$1.00(約¥110)の生活である。農民が圧倒的で、農閑期にはカ

ンボジア特産の絹織物、あまり質の良くないサファイアが少し産出されるのでその発掘、そして隣国ベトナムへの農作業の労働力での出稼ぎで生活を支えている。(働いて得た収入で、ベトナムの畑で取れた米を買い持ち帰る)

★ラタナ・キリの入口、バンルン空港

ラタナ・キリへの入口が、バンルン空港である。外国人の空港使用料はUS\$25。

滑走路は土を固めて出来ており、航空機は30年程前に中国から購入(寄贈)の双発ターボ機で、60



名程度の収容で、機内のサービスはあつたり無かつたり。

今回もカンボジアに到着した日に、この飛行機が修理の為キャンセルになり、丁度裕福な米国人の5名の人々がラタナ・キリの貧困者のボランテイアに行く予定であつたので、彼らが雇つたチャーター機に便乗できた。

首都プノンペンからは、月曜日と金曜日の2便のみで、フライト時間は1時間半弱。

プノンペンへの陸路は、誰に聞いても、1週間ほどトラックの荷台に載れば着くだろうが、殆どの人が行つた事が無いので知らない。道路は国道とは名前だけで、土のこぼこ道、いったん雨が降れば泥濘、通行が不能になる。一方では、メコン川の川舟使もあるが、本来は荷物輸送の川舟であり、途中で荷物の集荷をするために寄つて行くので、10日は必要だという。

★我々の支援する「コーヒー」農園の現状

我々が支援している農園は二つあり、その一つがEung Linさんの農場である。

2003年11月収穫の第一回

目のカンボジアコーヒー豆を2トン購入した。東京の各地の店舗で珈琲を焙煎しながらビーンズ・チェーン店を経営している「やなか珈琲店」のオーナー権藤氏が、我々のカンボジア国民、特に農民へのボランティア活動に積極的に共鳴していただき、第一回目のラタナキリ・コーヒー・ブレンド豆を店舗で販売し、又ギフトとして老人ホーム、教会等で販売を開始した。

一方、米国でもボストン大学文化人類学教授のホワイト博士も、Produced by Walla Walla Roastery in Conjunction with American Assistance for Cambodia and Japan Relief for Cambodia の趣旨で、Ratanakiri Blend コーヒーとして販売している。

この農園は、基本的な栽培条件が全く整っておらず、収量が極端に少ない。写真は病虫害に冒された葉っぱ（スズ病菌に侵された）や散水不足によりコーヒー樹が極端に痩せて弱々しい。

彼の農場では、1998年に初めてコーヒーを出荷したが、それはベトナム向けであり、栽培した豆をそのままベトナムに出していた。従って、基本の品質問題は全く彼には理解できておらず、全て



Eung Lin さんの農場



ベトナムから海外へ再輸出される際に、品質管理をされていた様子である。

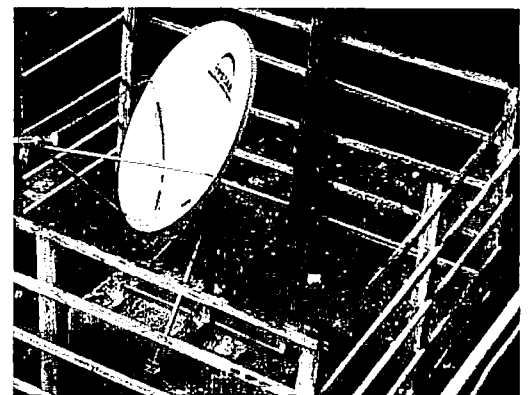
農園も散水不足、肥料不足、管理不足で、一からの栽培指導を行わねばならない状態であった。

ダイクさんの支援金で散水用のホース（地上に薄く見えているパイプホース）により、葉っぱの色もようやく緑がかかって来ている。昨年12月の収穫では、1ヘクタールで600kgの収穫があったが、これは世界のロブスタの平均的収穫量に比べて約1/3強程度にしかない。

彼の農園の面積は2ヘクタールの小農民であるが、彼は役所に勤めながら農場も持つて、コーヒー栽培に努力している。農園まで京都のバンルンから10kmの距離に関わらず、1時間かかる。

この地域は標高600mであるが、県都バンルンに駐在するカンボジア政府農林省責任者と面談したが、年間雨量、土壌検査、水質検査、農場数についての詳細は記録が無い。そのため資料づくりの指導から始める。

カンボジアのコーヒー園から日本に持ち帰った土壌は、金沢大学大学院理学部の広瀬教授に土壌検査を分析依頼し、又、病虫害菌に



冒されている樹の葉っぱは、スキャナーで写真取りして、ブラジルの友人のコーヒー農園技師に指導を仰ぐ。更に詳細な問題点については、神戸大学大学院農学部の安田教授に指導を仰ぐ。

それらを、カンボジアの小学校に添えられたインターネット可能なコンピュータに整理して送り、コーヒー農民への情報提供のツールとした。

★カンボジアのコーヒー栽培

カンボジアには、1996年ベトナムからロブスタ種が、1998年ラオスからアラビカのカティモール種が移植された。現在ではロブスタ種栽培が中心で、アラビ

力種栽培は経験不足、知識不足で成功していない。更に病虫害対策の農薬や肥料散布の出費、標高の問題（地域一体は400〜650m程度）も影響しているように思われる。

当初はベトナム人が栽培指導を行い、ロボスタの収穫豆を買いに来てくれたのだが、世界的な生産過剰とベトナムのロボスタ豆減作の煽りで、ベトナム人が買いに来てくれないと言う。ベトナム政府としてもカンボジアからのコーヒー豆輸入、というよりもメコン川の支流を舟で渡って移送（密輸出）は、国内の生産過剰もあり、最近では警備が厳しいと言う。

カンボジア農民は、彼らベトナムの仲買人が去った後は、どこに売ってよいかのその方法、流通システムも分らない。

カンボジア政府のコーヒー農園管理、品質管理基準も無く、農村支援策も無く、もう完全に彼らは諦めていた。

彼らが諦めるということは、例えば小額とは言え現金収入が絶たれる。その為の芥子栽培などの転作の考えを阻止せねばならない。

勿論転作の費用、アイデア、転作農作物の知識や知恵、経験が乏しい上、転作農作物が仮に収穫さ

れても、それが売れるまでの生活が、非常に重大な問題である。

農場までは、日本製4WDの車も道路の窪みに入り込んで動けず、2台目の車に牽引される。これが乾季であり、雨季になれば基本的に道路は使用できない。この道路は国道である。

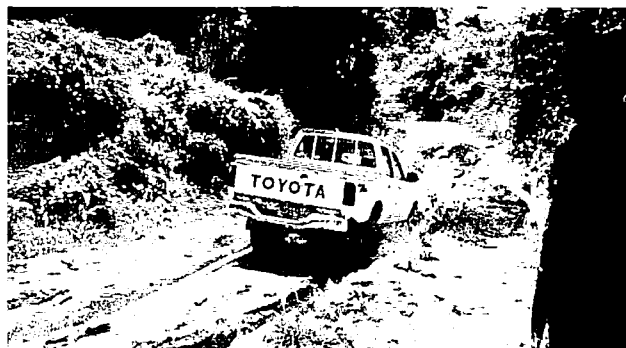
続いて道路に倒木があり、ドライバーはテキパキと荷台に乗せている大きな鉋で倒木を切り、切り取った大きな枝を自動車のワイヤーで引き剥がして、道路を広げて進む。

★寄付で建設された学校

ダイクさんの寄付により建設された学校の一つを、訪問する。

県都から車で2時間半（約30km）の距離であるが、その道中の道路は正にジャングルを突き抜けるような道路である。複式学級で6歳から15歳までの生徒が学んでいる。

学校では3カリキュラムに分かれて、全部で130名程度の生徒であるが、これはその村からの学校に行ける子供達だけで、未就学者も勿論いる。英語教室とIT教室の教師の給与は、ダイクさん負担。カンボジアのクメール語での



農場までの道路

基礎教育の教師の給与は、カンボジア政府からの支給であるが、半年前から未納になっているという。その学校に、日本から中古のコンピュータをダイクさんが持参して、セットする。

セット完了後、早速インターネット通信のテストである。

また、学校の屋根の上には、サンヨー電機から寄付を受けたソーラーパネルで発電し、教室の中にはバッテリーで蓄電するか、発電機で発電し（ホワイト教授の寄付した発電機設置の小屋の中で）、インターネット用の電源としている。学校は昼間だけの授業なので、教室には電灯の設備は必要ない上必要としない。学校に来ている生徒の半分が裸足で、半分がゴムの草履をはいている。

カンボジア人の識字率は、永年の内戦により低く、正確な所は良く分らない。内戦終了後、今から6年前の1998年にやっと総選挙が行われたが、ベトナム戦争後のポルポトによる大虐殺で、当時の総人口が800万人であった内、170万人が殺されたという悲劇的な国である。現在では人口1100万人に急増しているが、圧倒的に子供が多く、学校が全く不足している。



★ラタナ・キリ県最大のコーヒー農園

ラタナ・キリ県で最大のコーヒー農園(200ヘクタールあり、そのうち180ヘクタールをコーヒーに、残りをカシユナツツ、ペパー、ピーナツ類の栽培としている)のオーナーは4名であるが、総責任者はNou Ty氏、元サン派の上級佐官クラスの高級軍人で、ベトナムで学びモスクワ大学卒業というエリートである。家族はプノンペンに残し、定期的にこの農園に来ている。農園はバンルンから50kmのベトナム国境まで後10kmのO Ya Davに位置する。

昨年度は100トンの収穫があった。ヘクタールあたり111本のロブスタ種樹を植えており、ヘクタールあたり、今年も肥料不足もあり(逆鞘で肥料購入費用が出ない)、収穫量が極端に少なく70トンであった。

ラタナ・キリ県でのコーヒー栽培は、4農園程度と言う

(正式には誰も知らない)。

2年前まで県知事の広大な農園でもコーヒー栽培をしていたが、現在は全て伐採して、カツシユナツツに転作している。

カンボジアの雨季は5-10月、乾季は11-4月で、収穫は11、12月である。乾季に自分用の農園のイリゲーションの為に川を堰き止めて、小さな人造ダム(池)を作っている。

Nou Tyさんの農園での、昨年11月、12月に収穫したコーヒーの生産コストは、表のようになる。自分で作った豆がどのような品質なのか、全くテストしたことも無いので、群馬県で購入した生豆水分測定器(¥35,000)を



ラタナ・キリ県最大のコーヒー農園

当方で購入して持参し、又、金属製の手編み炒り器具での焙煎デモンストレーションとカップテストを教える。(次頁上段写真) 尚、水分測定器、その他の器具類は、地域全員で使用する旨確認し無償供与する。

★プノンペンで最大のマーケット(ロシアン マーケット)の中のカフェ

ベトナム戦争後、ベトナムと旧ソ連がカンボジアに越境して占領したときに、プノンペンで出来た

1. 水源から水をくみ上げる (4~5万リッター、リッターUS\$45.-) ポンプアップ用の燃料代が US\$20,000.-
2. 肥料代 US\$200.-/ton 使用量 70~90 tons 合計 US\$18,000.-
3. 人件費 US\$2.-/Day 労働者 60名 年間 US\$30,000.-
4. その他雑費 US\$10,000.-
5. Total 78,000.-

この計算から、ポンドあたり US\$70.-/lb になり、London 定期相場の倍である。

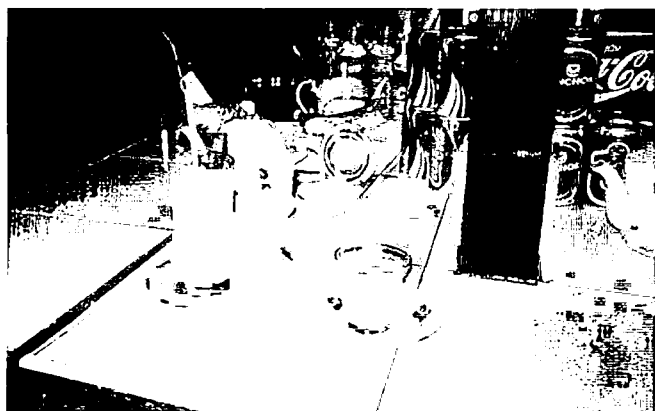


ソ連人向けのマーケットがある。その後、旧ソ連兵の撤退後、ロシアン マーケットと呼ばれ、日常生活上のあらゆる物、食物、雑貨、衣料、土産物等々が、所狭しと並んで売られている。

その中の一角に「The Best Lead Coffee in Phnom Penh」の看板がある。3m程度のカフェ(?)で、カンボジア名物のアイスコーヒーを飲む。インドシナ半島独特のアイスコーヒーである。フランス植民地時代から使われていたネルドリップ方式で、深く焙煎したカンボジア・ロブスタ豆を細かく粉砕しネル漉しで抽出するが、一度ドリップしたコーヒーエキスを3〜4度ろ過して、陶器製ポットに入れる。

コーヒーエキスは80ccほど入るガラスカップに入れて、別に200cc程度のガラス・カップに氷を入れ、練乳(コンデンス・ミルク)と砂糖をタップリ入れ、そこに80ccほどのコーヒーエキスを注いで、冷えたコーヒーを飲む。次から次に大勢の客が来る。1杯US15セント(17円程度)。

オーナーの女性のパフオーマンスは絵になる。日本でもスタイルやデザインに工夫すれば、結構人気が出るメニューになると思わ



れる。

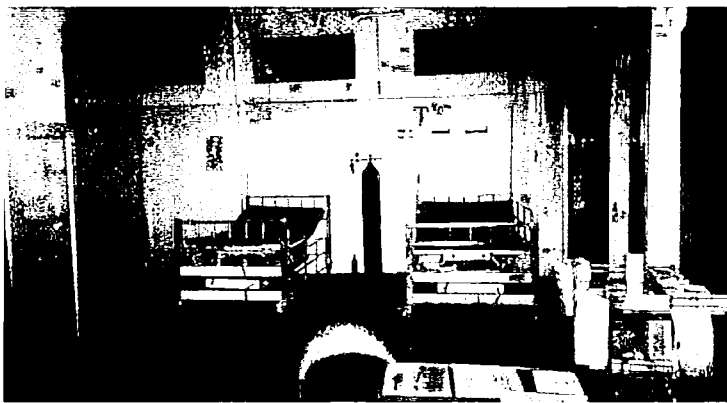
★フノンペンの孤児院での歓迎会

両親が無くなって、男子が3歳になれば、お寺に預けられる。この子供は、一生涯托鉢でのお坊様の生活。

若しお寺が一杯であれば、孤児院に、運がよければ入所できるが、孤児院は、その殆どが外国のボランティア団体の経営になっている。

一応は外部にある高校までの面倒は見ってくれるが、生活は年長者が全て年下の子供達の面倒を見るシステム。





一定の年齢になれば、絹製品や民芸品の作業場で働き、施設の管理費用を自分達で稼ぐ。

その施設の資金応援者である我々グループの訪問に併せて、子供たちが自分達で裁縫して作った衣装で、歓迎のカンボジア民謡をダンスしてくれた。

カンボジアでは、仮に大学を卒業できて、英語かフランス語が話せて、IT操作技術が可能であれば、就職できたとしても、その給与は、月額¥5〜6、000円程度であると言う。

★ラタナ・キリで一つある大きなシアヌーク記念病院

治療器具、診察医師、その他設備不足の為に、プノンペンのシアヌーク記念病院は、米国マサチューセッツ工科大学メディカルセンターとインターネット通信で、医師が治療法の相談をする。あくまで高級で高度な治療は不可能であるが、応急処置程度はこのシステムで治療することが可能となった。パラボラアンテナ、ソーラーパネルは、日本企業からの寄付である。カンボジアで重大な病気、難度の病気になった場合は、シンガポールが香港まで行かねば、到底その治療が不可能である。

我々は最終日に、駐カンボジア特命全権の高橋大使、外務省一等書記官、農水省出向一等書記官と、プノンペンで1時間半程面談する機会を持てた。我々のボランティア活動の一端を報告、披露させて頂き、新生カンボジアが農業国として立国できるように、是非日本政府のバックアップを陳情した。大使館は厳重なガードで固められていたので、守衛室で持ち物検査の時に持参したカメラも一時預

けにされた結果、記念写真が残っていないのが残念である。

★第2回目のカンボジア・コーヒー豆が入荷しました

第2回目のカンボジア・コーヒー豆が、2004年7月中旬に日本と米国に入荷された。

第1回目の協力者である「やなか珈琲」様をはじめ、北海道から鹿児島まで、合計8企業が協力者に加わり、このボランティア活動に、積極的にご協力いただいた。

第2回目のコーヒーは、第1回目よりも、指導した結果を農民が堅く守って栽培した事もあり、品質的にも素晴らしい豆の到着となる。続いて、多くの賛同者からのご協力を期待している。

農作物の指導と品質向上は、ロングランでパーマネント(永久的)に続けねばならない。

換金作物で当面の現金収入を得た上、彼らの作物が多くの人々に飲まれているという嬉しいニュースが、カンボジア・コーヒー農民の励みにもなり、継続した生活と楽しみにつながる事を希望しています。

最新刊

コーヒーソング20

乗金健郎・著

A5判上製140頁
本体価格1400円
いなほ書房・刊

「ブラック・コーヒー」「コーヒー・ルンバ」「コーヒー・カンタータ」など、コーヒーソング20曲を選び、そのレコードの生いたち、歌手や楽団、歌の内容について詳述した労作。